

Title	高齢者の心身機能に対する自己評価と他世代評価における年代差の検討
Author(s)	石岡, 良子
Citation	生老病死の行動科学. 13 P.25-P.32
Issue Date	2008
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/7568
DOI	10.18910/7568
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

高齢者の心身機能に対する自己評価と他世代評価における年代差の検討

The age differences in the evaluation of elderly people's mind and body function between reports by self and other generations.

(大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程) 石岡 良子

Abstract

Age differences in the evaluation of elderly people's functional capacities would relate to the relationship between elderly and their family, and the reliability of the assessment of the elderly. This study aimed to reveal how much there were differences in the evaluation of elderly people's functional capacities between reports by self and other generations. I hypothesized that grandchildren would underestimate their grandparent's functional capacities and that middle-aged children and grandchildren would evaluate that their grandparent has much narrower eyesight and weaker audibility to hear life sound than grandparents themselves. Participants were 136 three-generation families. Results showed that the evaluation of grandchildren was significantly higher in the five areas of their grandparent's functional capacities than that of their grandparents ($p < .01$). Also, grandparents significantly overestimated their levels of eyesight than middle-aged children ($p < .1$). These results suggest that such discrepancies seemed to be different by the types of functional capacities and the age of evaluators. Future studies needed to use an objective indicator are needed for testing the reliability of subjective reports.

Key word: age differences in evaluation, elderly people's functional capacities, three-generation families, subjective reports

I. 問題と目的

加齢に伴って心身機能が低下することは広く知られている。また、高齢者と若い世代の間に、高齢者の心身機能に対する捉え方に年代差が存在することも認められる。

この年代差が高齢者とその同居家族にある場合、その差が高齢者と家族の関係性へ影響すると考えられる。高齢者にとって家族の存在は重要であり（直井，2005；安達，1999；古谷野，1997）、高齢者の身体および精神状況を家族らが把握・理解することは、高齢者との良好な関係を築き、精神的な安定を含め健康状態を維持・向上するためにも重要である（岡本，2000）。また、在宅高齢者の生活機能をアセスメントする際、高齢者本人による回答と家族による評価が異なる場合があることから、心身機能に対する高齢者本人と家族の評価にどのような乖離がみられるか検討する意義がある（藤原・天野・高林・熊谷・吉田・吉田・森・渡辺・森田・永井・新開，2003）。しかし、高齢者の心身機能に対する自己評価と家族評価に関する研究は少なく、高齢者の心身機能に対する自己評価と家族による評価にどのような年代差が存在するか明らかにする必要がある。

藤原ら（2003）や岡本（2000）は、身体的および精神・心理的状态や生活機能に関して高

齢者と家族の回答の一致性を検討し、家族（配偶者、娘、嫁、息子、婿）が観察しやすい機能ほど一致率が高く、一方はっきりした行動を伴いにくく主観が介入しやすい機能では一致率が低いと報告した。また、渡邊・嶋田・前田・内田・熊王（2000）は、高齢者の老性自覚とそれに対する娘、嫁、息子、婿の子世代の認識の差を検討し、身体機能に対する評価は高齢者と子世代で同じ程度であったが、認知機能に対しては子世代の方が過大に評価する傾向があったと述べている。つまり、高齢者の心身機能に対する自己評価と家族評価の乖離は、対象とする機能によって在り方が異なるといえる。

身体機能と認知機能の加齢変化は、老年期の行動に大きな影響を及ぼす（山本，1992；横井，2005）ため、高齢者の適応能力をとらえるうえで重要である（長嶋，2003）。その中でも「視覚」と「聴覚」の低下は、生物学的加齢を代表する現象であり（権藤，2008）、コミュニケーション上重大な障がいとなりうる。高齢者の心身機能に対する自己評価と家族評価の先行研究（藤原ら，2003；岡本，2000；渡邊，2000）では、視覚の項目を「目が見えにくくなった」などの「視力の低下」として1項目で質問している。しかし、加齢によって生じる「視覚」の日常生活における問題点は「視力」の機能低下だけではない。たとえば、家族や車が祖父母の背後から近づいた時に祖父母がそれらの接近に気づいていないなど「視野」の狭まりが問題となりうる。また聴覚の項目では「会話が聞きとりにくい」など「会話」に焦点を当てているが、「聴覚」の衰えは会話上だけではなく電話やインターホンの音に気がつかないなど、「生活音」の聞こえにおいても問題として生じる。これらの「視野」の狭まりや「生活音」の聞こえは、本人よりも周囲の人の方がそれらの機能低下に気がつきやすいと考えられ、「視力」や「聴力」の評価の乖離とは異なる方向に乖離すると推測される。

また、藤原ら（2003）や岡本（2000）は、家族の評価者として配偶者と子世代（娘、嫁、息子、婿）を対象としているが、高齢者にとって経済的・手段的・精神的援助の中心となるのは子世代である。よって、この二世代間での認識を比較することは重要であると考えられる。一方、祖父母と孫を対象とした研究も盛んにおこなわれており（小川，1993；大川，1996；前原・金城・稲谷，2000；Atchley, R.C., & Barusch, A.S, 2005）、少数ではあるが三世代を対象とした調査（守屋，1987；岡・上田・吉川，1997）も行われている。しかし、高齢者の心身機能に対する自己評価と家族評価の先行研究で三世代間を比較した研究はみあたらない。三世代を対象に老人観などを調査した守屋（1987）は、壮年期は老年期の認識に近いが青年期は他の世代とは独自の認識があると示唆している。また、若い世代がもつ高齢者へのイメージや態度を調査した研究（下仲，1980；保坂・袖井，1988；中野，1991；前畑・服部・成瀬・大野，1999）も多くなされ、保坂ら（1988）が大学生は老人の体力や活動力、生産性などに対して非常に否定的なイメージを持っていると報告しているように、多くの研究結果において若い人々が高齢者に対して抱く一般的態度は否定的であると報告されている。藤田（2000）はこのような高齢者に対する他世代の画一的な態度が、高齢者とのコミュニケーションを歪ませる原因になっていると述べ、Schaie（2002）も、高齢者に対する否定的な固定観念が、交流関係を歪めるほどに高齢者や高齢者と交流する若者、若い成人、中年の人にも影響を及ぼすと指摘している。よって、高齢者に対する次世代の認識について二世代間ではなく、高齢者世代、子世代、孫世代の三世代間で比較する意義があるといえ、孫世代は高齢者世代よりも機能低下したと否定的に評価すると推測される。

そこで本研究の目的は、高齢者の心身機能に対する自己評価と子世代と孫世代の評価にお

表1 祖父母の心身機能に対する評価の項目

視覚	X1 (視力) メガネを使わないと、文字や人の顔が見えにくくなった
	X2 (視野) 背後から車や人が近づいても気付きにくくなった
聴覚	X3 (日常会話) 1対1の会話が聞き取れないことがおおくなった
	X4 (生活音) テレビの内容や電話のベルがききとれないことがおおくなった
味覚	X5 食べ物や薬の味がわかりにくくなった
嗅覚	X6 花や食べ物のおいがわかりにくくなった
体力	X7 体力が落ちてきた
指先の動き	X8 食べ物や飲み物をこぼすことがおおくなった
認知機能	X9 (記憶力) 新しく覚えたことを思い出しにくくなった
	X10 (学習) 新しいことを覚えるのがおっくうになった

注. それぞれの項目の文頭は「年をとるにつれて、」から始まる。

いてどのような年代差がみられるか明らかにすることとし、(仮説1) 心身機能に対する孫の評価は高齢者よりも低く、(仮説2) 「視野」の狭まりや「生活音」の聞こえに対する評価は高齢者よりも子世代や孫世代の方が低下していると回答するという2つの仮説を検討した。

II. 方法

1. 調査対象者および調査手続き

祖母 (または祖父)、同居している子世代 (嫁・娘・息子・婿)、孫世代の三世代を対象に、個別回答・自記入形式の質問紙調査で実施した。対象に該当する世帯に複数の祖母 (または祖父)、子、孫が同居している場合は、各世帯で1世代につき1人を任意に選出してもらい、孫のみ祖父母との同居経験はあるが現在は同居していない人も含めた。平成19年10月に、著者がA大学の授業を利用し調査対象の世帯に該当する学生に、また4つの大学と1つの高校において各校の先生や在校生が対象となる学生に、調査依頼書1部と三世代分の質問紙および返信用封筒1通を同封した封筒を配布した。その際、調査依頼書にて調査の内容やプライバシー保護などに関する説明を行い、質問紙への記入をもって調査に同意したものとする旨を説明した。422部配布し、12月下旬までに136世帯の調査票を回収 (回収率32.2%) した。

2. 調査内容

1) 基本属性

祖父母には性別と年齢を、子と孫には年齢、祖父母との続柄、同居期間について記入を求めた。

2) 祖父母の心身機能に対する評価

加齢に伴い行動の変化に大きな影響を及ぼすと考えられる心身機能の項目を中心に、渡邊

表2 祖父母の年齢別にみた子の年齢の関連 (人数)

祖	子	50代未満	50代以上	合計
	70歳未満	47	13	60
	70歳以上	37	39	76
	合計	84	52	136

表3 祖父母の年齢別にみた孫の年齢の関連 (人数)

祖	孫	20歳未満	20歳以上	合計
	70歳未満	37	23	60
	70歳以上	39	37	76
	合計	76	60	136

ら(2000)や齋藤・安本・矢嶋・坂野・中嶋(2002)が用いたものを参考にし、1「視力」、2「視野」、3「日常会話」、4「生活音」、5「味覚」、6「嗅覚」、7「体力」、8「指先の動き」、9「記憶力」、10「学習」の10項目を選択し質問紙を作成した(表1)。回答は、各機能が低下したと「とても思う(=1)」から「まったく思わない(=5)」の5件法で行った。祖父母に対しては自分自身の心身の変化を、子や孫に対しては祖父母の心身機能の変化を評定してもらう項目としてたずねた。

Ⅲ. 結果

調査票を回収した三世帯世帯の136世帯(回収率32.2%)を分析対象とし、回答に欠損が見られた場合、関連するデータ分析で削除し分析を行った。また、祖父母の心身機能に対する評価は、得点が低いほど「機能が低下した」と評価していることを示す。

対象者の基本属性

高齢者は、祖母103名(75.7%)祖父31名(22.8%)不明2名(1.5%)であり、75歳までの高齢者が60名(44.1%)、75歳以上の高齢者が76名(55.8%)であった。子の年齢は40代82名(60.3%)、50代51名(37.5%)、60代1名(0.7%)であった。子の続柄では嫁が最も多く68名(50%)、娘36名(26.5%)、息子29名(21.3%)婿1名(0.7%)、不明2名(1.5%)名であった。同居期間は20～30年が42名(30.9%)と多く、次いで10～20年が33名(24.3%)であった。孫の年齢は18歳未満32名(23.5%)、18～20歳44名(32.4%)、21～24歳52名(38.2%)、25歳以上8名(5.9%)であり、女性108名(79.4%)、男性28名(20.6%)であった。孫の80%以上は10年以上の同居経験があった。

また、祖父母の年齢別に子の年齢と孫の年齢の関連について χ^2 独立性の検定を行ったところ(表2、3)、祖父母の年齢と子の年齢においてのみ0.1%水準で有意な関連がみられ($\chi^2(1) = 12.48$)、祖父母の年齢と孫の年齢では有意な関連はみられなかった。

表4 各項目における年代別評価得点の平均値と分散分析の結果

	孫	子	祖父母	F 値	
視力	2.55	2.41	1.98	11.11	孫>祖 **、子>祖 **
視野	3.05	2.58	2.86	7.12	孫>子 **、祖>子 †
日常会話	2.39	2.42	2.55	0.81	n.s.
生活音	2.86	2.60	2.84	2.23	n.s.
味覚	3.85	3.60	3.79	2.30	n.s.
嗅覚	4.19	3.63	3.62	16.31	孫>祖 **、孫>子 **
体力	2.25	1.84	1.63	17.83	孫>祖 **、孫>子 *、子>祖 †
指先	3.66	3.21	3.32	6.30	孫>子 **、孫>祖 †
記憶	2.73	2.40	1.99	19.42	孫>祖 **、孫>子 *、子>祖 **
学習	3.21	2.55	2.08	39.89	孫>祖 **、孫>子 **、子>祖 **

† p < .1 * p < .05 ** p < .01

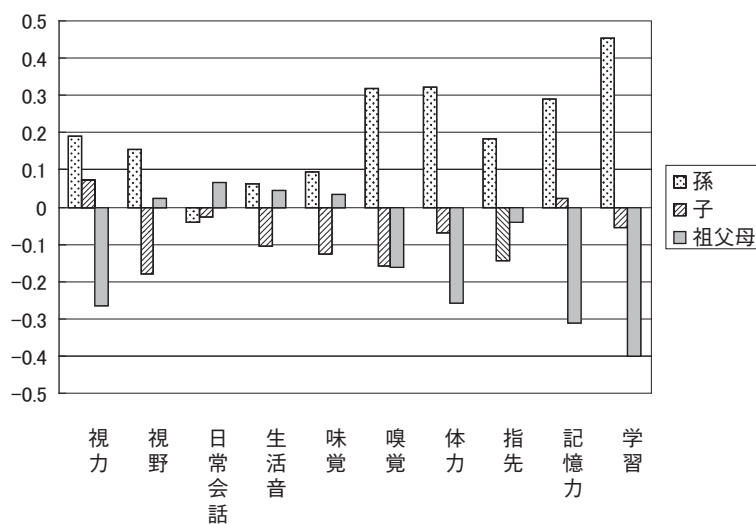


図1 各項目における年代別評価の標準化得点

心身機能の項目別、祖父母の評価と子世代・孫世代による評価との比較

祖父母の心身機能において、項目別にどのような年代差があるか検討するため、各項目で対応のある1要因の分散分析を行ったところ、視力、視野、嗅覚、体力、指先、記憶、学習の項目について1%水準で有意な差がみられた(表4、図1)。多重比較(Bonferroni法)を行ったところ、視力・視野・嗅覚・体力・指先の動き・記憶力・学習において、孫の評価は祖父母や子の評価よりも有意に高かった。視力・記憶力・学習において、子の評価が祖父母の評価よりも有意に高かった。また視野においてのみ、有意傾向であるが祖父母は子よりも高く評価していた(p < .1)。

IV 考察

結果より、祖父母の心身機能に対する自己評価と家族評価で年代差がみられない項目とみられる項目があることがわかった。三世代間で有意差がみられなかった項目は「日常会話」「生活音」「味覚」であった。聴力の低下を評価した「日常会話」「生活音」では、先行研究で指摘される通り、家族側も変化に気がつきやすいため評価差がみられなかったと考えられる。日常生活の場面では、聴力の低下がコミュニケーション上の問題をもたらすと推測されるが、聴力の低下に対する評価において本人と家族では差がないことが明らかとなった。また、聴力において評価差がみられなかったもう一つの理由として対象者の属性が考えられる。聴力は女性よりも男性の方が低下し (Atchley, R.C., & Barusch, A.S., 2005)、視覚ほど早い年齢から機能低下が始まらない (権藤, 2007)。今回の調査では女性が多く、約半数が70歳未満であった。そのため、実際に聴力が低下した高齢者じたいが少なく、年代差がみられなかった可能性がある。そして「味覚」で有意差がみられなかった理由として、「日常会話」「生活音」とは異なり、味覚の変化は小さく周囲も本人も味覚の変化に気がつきにくいことが考えられる。一方、三世代間で有意な差がみられた項目は、「記憶力」「学習」であった。各項目の得点を標準化した結果より祖父母は他の機能よりも認知機能を低く評価する傾向が推測されることから、認知機能に対する評価は、先行研究が指摘するように主観が介在しやすいため有意差があったと考えられる。認知機能について高齢者の自己評価は低くネガティブであることからアセスメントする場合には注意する必要があるといえる。

孫と祖父母の有意な評価差があったのは視力・嗅覚・体力・記憶力・学習の5つの機能であり、これらの機能において孫は祖父母本人よりも機能は低下していないと評価していた。よって、仮説1は支持されず、多くの先行研究で孫世代は否定的な高齢者像をもつとされるが、祖父母の心身機能に対して孫は他の年代よりも低下していないとポジティブに評価することがわかった。この解釈として、本研究では被評価者を同居している祖父母と限定しているため、一般的な高齢者像を対象とした研究とは異なる結果が得られたと考えられる。また、孫は「視野」「嗅覚」「体力」「指先の動き」において子よりも有意に高く評価している。孫が子や祖父母よりも高く評価する理由として、孫は自身の機能低下を実感していないため祖父母や子よりも高く評定したことや、子に比べ孫は祖父母との共有時間や同居年数が短いことから他の年代とは評価が乖離した可能性が考えられる。

仮説1の結果より、以下では祖父母と子の年代差に限って仮説2を検討する。「視力」は祖父母の方が子よりも低下したと捉えており、「視野」は、子の方が祖父母よりも低下したと評価する傾向にあった。「視野」は周囲の方が機能低下に気づきやすい項目といえ、高齢者本人でも機能低下に気づきにくい側面があることがわかった。一方、「日常会話」と「生活音」では年代差がなく、「聴覚」の機能において周囲の方が機能低下に気づきやすい側面は見られなかった。よって、視力に関する仮説は支持傾向であったが、聴力に関する仮説は支持されなかった。ただし、「視野」に対する評価差の有意水準は10%であるため、今後サンプル数を増やした研究で検討する必要がある。

本研究より、高齢者の心身機能に対する自己評価と家族評価において評価する機能の項目や評価者の年代によって評価差の在り方が異なる可能性が示された。よって、対象となる機能や評価者を考慮したうえで査定を行う必要があると考えられるが、今回は客観的指標を用いていないため、評価が一致していても信頼性が高いとはいえない。今後、各年代の自己評

価の信頼性を検討するためにも客観的指標をとりいれた調査を行う必要がある。

追記

本論は著者が平成19年度香川大学教育学部人間発達環境課程に提出した卒業論文のデータを再分析したものである。

引用文献

- 安達正嗣 2004 高齢者の家族コミュニケーションに関する研究にむけての序論 千里金蘭大学紀要 生活科学部・人間社会学部, **1**, 9-15.
- Atchley, R.C., & Barusch, A.S. 宮内康二 (編訳) 2005 ジェロントロジー 加齢の価値と社会の力学 きんざい.
- 保坂久美子・袖井孝子 1988 大学生の老人イメージ -SD法による分析- 社会老年学, **27**, 22-33.
- 藤田綾子 2000 高齢者と適応 ナカニシヤ出版.
- 藤原佳典・天野秀紀・高林幸司・熊谷修・吉田祐子・吉田裕人・森節子・渡辺修一郎・森田昌宏・永井博子・新開省二 2003 地域在宅高齢者における認知機能低下者の生活機能の評価: 本人と家族の評価における乖離の関連要因 日本老年医学会雑誌, **40**, 487-496.
- 権藤恭之 2007 感覚・知覚のエイジング 谷口幸一・佐藤真一 (編) エイジング心理学 - 老いについての理解と支援 - 北大路書房, 69-86.
- 権藤恭之 2008 生物学的加齢と心理的加齢 権藤恭之 (編) 朝倉心理学講座 15 高齢者心理学 朝倉書店, 23-40.
- 古谷野亘 1997 高齢者の家族関係 - 公的介護保険は親孝行を減らすか? - 明治生命フィナンシュアランス研究所調査報, **21**, 3-11.
- 前原武子・金城育子・稲谷ふみ枝 2000 続柄の違う祖父母と孫の関係 教育心理学研究, **48**, 120-127.
- 前畑夏子・服部ユカリ・成瀬優知・大野昌美 1999 老人看護実習による看護大学生の老人イメージの変化 富山医科薬科大学看護学会誌, **2**, 103-116.
- 守屋滝乃 1987 老人に対する意識調査 看護教育, **9**, 537-411.
- 長嶋紀一 2003 精神機能の変化 長嶋紀一 (編) 介護福祉士選書・7 新版 老人心理学 建帛社, 23-44.
- 中野いく子 1991 児童の老人イメージ -SD法による測定と要因分析- 社会老年学, **34**, 23-36.
- 直井道子 2005 高齢者と家族研究の課題 老年社会科学, **23**, 345-350.
- 小川隆章 1993 孫と祖父母の関係に関する研究 応用心理学, **18**, 13-24.
- 岡 澄子・上田礼子・吉川千恵子 1997 3世代同居家族の意識と行動 - 性役割観を中心に 保健の科学, **39**, 892-896.
- 岡本和士 2000 身体的および精神・心理的状态に関する高齢者と家族の回答の一致性に関する検討 日本老年医学会雑誌, **37**, 371-376.
- 大川一郎 1996 祖父母と孫の心理的關係 孫からみた祖父母 - 交流の実態・心理的関わり・その影響因 - 家庭教育研究, **1**, 39-44.

- Schaie KW., & Willis, S.L. 岡林秀樹 (訳) 2005 成人発達とエイジング ブレーン出版.
- 下仲順子 1980 青年群との対比における老人の自己概念 -世代差、性差を中心として- 教育心理学研究, **28**, 39-45.
- 渡邊裕子・嶋田えみ子・前田志名子・内田美樹・熊王美佐子 2000 高齢者の老性自覚と老いに対する家族の意識 山梨県立看護大学短期大学部紀要, **6**, 113-123.
- 山本浩市 2007 老年期の心理的特徴 一番ヶ瀬康子・上田敏・北川隆吉・仲村優一 (監) 藤田綾子・村井潤一・小山正 (編) 新・セミナー介護福祉 [三訂版] 7 老人障害者の心理 ミネルヴァ書房, 18-39.
- 横井孝志 2005 加齢による身体機能の変化 日本機械学会誌, **108**, 43-46.